

万葉の ふるさと

高田 昇 著



高田 昇（たかだのぼる）

1922年9月兵庫県に生まる。神戸大学教育学部国語科卒。国文学部専攻生として国語学研究。現在甲南高等学校教諭。

＜現住所＞ 宝塚市小林菜切18



カラーボックス 42) 万葉のふるさと

昭和38年12月1日 初版発行 昭和49年11月1日 重版発行

著者 高田 昇 発行者 今井 龍雄 発行所 株式会社 保育社

540・大阪市東区内久宝寺町1の20 電話(06)762-1731(代) 振替口座大阪12346

東京支社/170・東京都豊島区南大塚1の1 電話(03)944-3581(代)

印刷/セブン印刷株式会社/モンノ印刷株式会社/用紙/日本加工製紙株式会社

© 高田 昇 1963

万一落丁・乱丁のときはお取り替えいたします。

(分)0125—(製)501042—(出)7700

はじめに

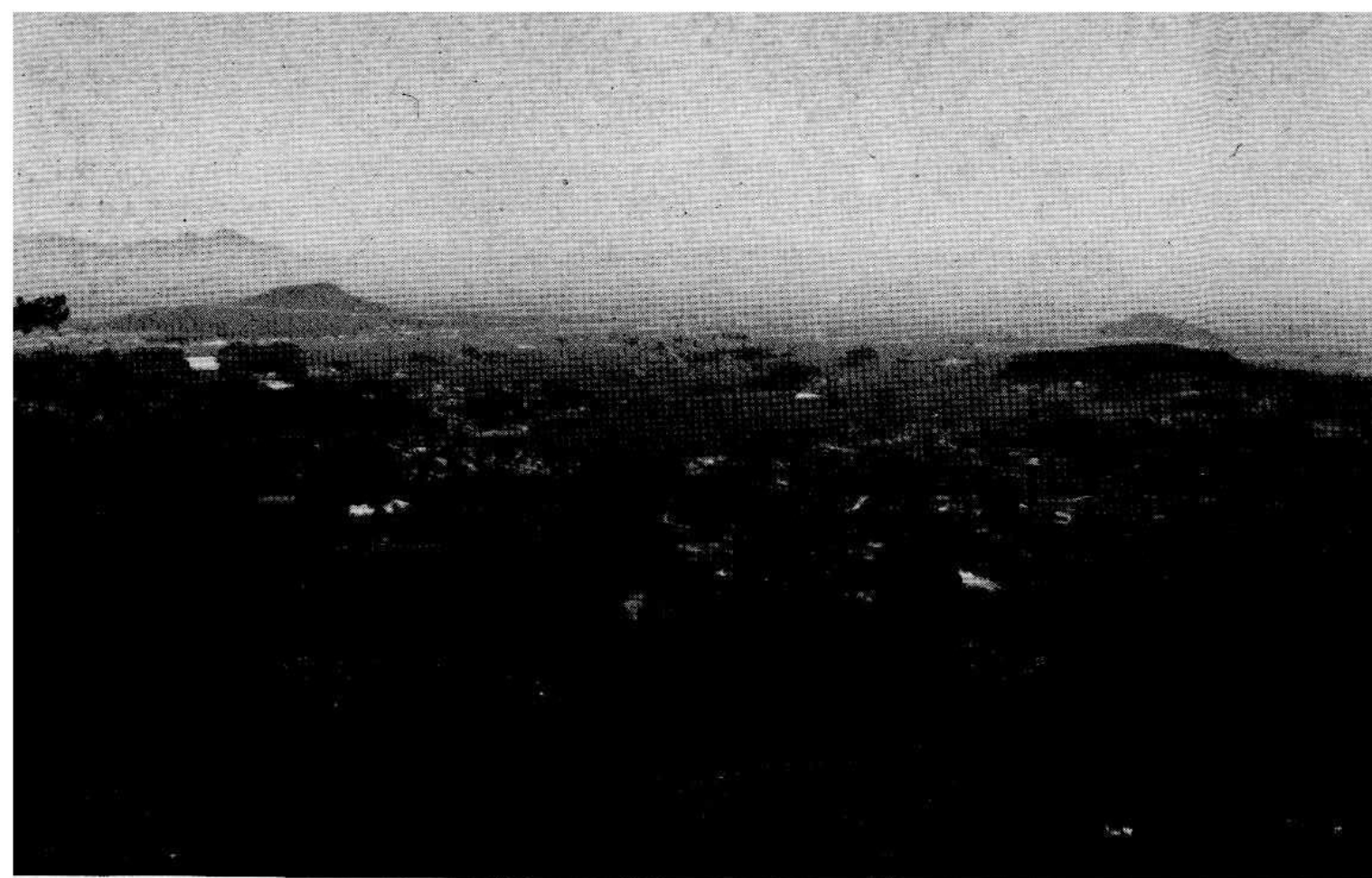
文字を通してしか万葉を知らなかったわたしが、万葉は歩かなければわからないと悟ったのは、万葉と何の関係もなく大和をおとずれたある日のことである。それ以来、わたしの万葉の旅は年々その回数を増していった。そして、今までは、おもしろくも何ともないと見のがしていた数多くの歌にも、風土的背景が次第に増大し、ことばの奥にひそむあるものへの魅力にとりつかれはじめた。それは単なる古代への郷愁ではない。風土を通して古代の現実に触れ得た時、胸の奥底からわいてくるあの感動の実感である。その時万葉は文字の生命を感じさせる。

本書は、その風土的なものを、写真で表現しようという試みの一つである。ひいては、万葉旅行の手びきにでもなれば幸いである。紙数の関係で、地域を大和の一部に限らなければならなかったのは、何といっても残念ではあるが……。なお本書は、同僚諸氏の大きな協力があって、はじめてできあがったもので、いわば協同作品である。国文専攻の増田繁夫氏をはじめとして、専門外の佐藤正明、田中竜児、山中英三、吉田豊、および喜多昭弘の諸氏の同行と、得がたい助書のもとにできあがった書であることを付記しよう。

目次

大和三山	一
飛鳥古京	三
あしび	六
飛鳥の古寺	一〇
川原寺・橘寺・飛鳥寺	
飛鳥の社	二四
飛鳥坐神社	
廃寺	二六
本薬師寺跡	
劔の池	二八
浄御方原	三〇
真弓・佐田の丘	三二
石造物	三四
酒船石・鬼の組・鬼の雪隠	
大原	三七

山田	四〇
哭沢の杜	四四
磐余	四六
古墳	四八
文珠院西古墳・石舞台・菖蒲池古墳	
藤原京	五三
造形	五六
聖林寺十一面観音・当麻寺四天王	
薬師寺塔の水煙・新薬師の瓦及び肘木	
忍坂	六二
栗原	六四
栗原寺跡	
阿騎	六六
倉椅	六八
多武の山	七二
山の辺	七四
穴師・つば市・三輪	



岡寺の裏山より大和三山を望む

左遠方は二上山，その手前は畝傍山。

右遠方は生駒連山，手前に耳成山，香具山。

・ 大 和 三 山 ・

大和には

群山あれど

とりよろふ

天の香具山

登り立ち

国見をすれば

国原は

煙立ち立つ

海原は

鷗立ち立つ

うまし国そ

あきづ島

大和の国は

(巻二、三)



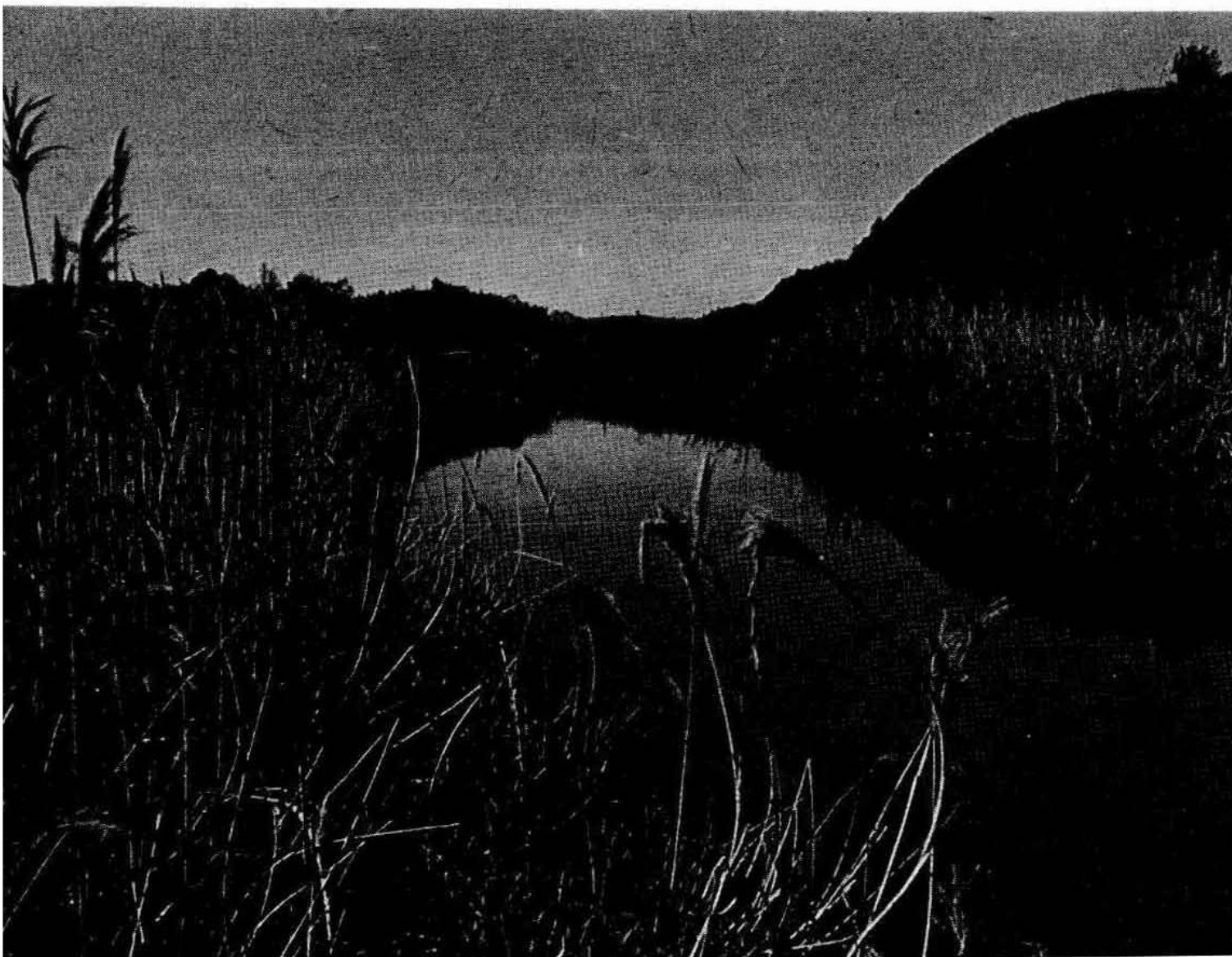
▶ 甘樫の丘から飛鳥古京を望む——
中央の流れは飛鳥川、右上方は耳成山

・ 飛鳥古京 ・

大化の改新、壬申じんしんの乱と二つの大きな事件を通過して、日本の国は、急速に律令国家としての形態を整えていくのであるが、その舞台の中心となったのは飛鳥である。

ここは允恭天皇いんきみをはじめとして、八代百余年の都のあったところ。血を血で洗うような戦いをくりひろげた古代の人たちは、また絢爛げんらんたる文化の花をもこの地で開かせた。この飛鳥古京をおとずれるとき、古代人の息吹きが膚にじかに感じられるような気がする。

飛 鳥 川





飛鳥川上空より藤原京跡



・あしび・

吾が背子に吾が恋ふらくは奥山の馬酔木あしびの花の今盛なり

(卷一〇、一九三)

どこか犯しがたい気品がある。それでいて、どうにでもしてそれを手折って、ちよつと人に見せたいような、いじらしい風情をした花だ。いわば、この花のそんなところが、花というものが今よりかずつと意味深かった万葉人たちに、ただきれいなだけならもつとほかにもあるのに、それらのどの花にも増して、いたく愛せられていたのだ。

(堀辰雄「浄瑠璃寺の春」)





川原寺の礎石





川 原 寺

往時は飛鳥三大寺の一つに数えられ、隆盛を極めたこの寺も、藤原京、さらに平城京への遷都にともない、次第に荒廃し、かつての大伽藍のあとは見るべくもない。しかし、今に残る礎石の数々は、昔のおもかげを無言で語っている。

生死いきしにの二つの海を厭いとはしみ

潮干しほひの山をしのひつるかも

世間よのなかの繁しげき借かり盧ほに住み住みて

至らむ国のたづき知らずも

右の歌二首は、河原寺の仏堂の裡に、倭琴の面にあり

(巻一六、三八四九、三八五〇)



瑪瑙の礎石



橘 寺

川原寺と道をへだてて南の高台に、真白な土べいが、横に長く、美しい直線を描く。ここは用明天皇の別宮のあとで、聖徳太子生誕の地と伝えられる。

この寺は太子建立七カ寺の一つで、たちばなを形どった五重の塔の心礎にも、ありし日の壮大さが想像される。

いつから寺となったかは明らかでないが、日本書紀によれば、天武天皇八年（六八〇）尼房が焼けたとあるから、それ以前であることは間違いない。今の建てものは新しく、見るべきものはないが、数多くの宝物は、その由緒を物語っている。

橘の寺の長屋に吾が率宿し

童女放髪は髪あげつらむか

（巻一六、三八三）